

## 卒業記念インタビュー：高3生が清教学園図書館での学びを振り返る

2026年3月某日。高校卒業を間近に控えた3名の清教生に山崎が話を伺いました。いずれも図書館での探究活動に熱心に取り組み、進路を開拓した生徒です。インタビューでは主に、自ら問いを立てる探究学習を通じて、本との向き合い方や学習観がどう変わったか、学校図書館という場での司書や仲間との対話が、自分という人間をかたち作ることにどう影響したのかが語られました。知識が単に習得されるだけでなく、分野を横断して結びつき、自身の内で体系化されていくプロセスに言及する3名の言葉からは、学校図書館の教育的価値を再検討するヒントが得られました。

「寄り道をすることで、物事の背景にある知識が広がり、結果として自分の教養が深まっていく。僕は、この『寄り道』こそが読書の、そして学びの醍醐味だと思うんです。」

高校 56期     さん(6年コース)  
研究分野：「ハワイ史」「帝国主義政策」「観光・資本主義」  
進学先：立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部



### ――中高6年間で、本との付き合い方は何か変わったかな

最初は本当に、自分の好きなことだけを追いかけてましたね。中学2年生の最初くらいまでは、歴史漫画とか好きな小説とか…楽しみのための読書が中心でした。物語の筋を追って「面白いな」と感じるくらいの、軽い読み方だったと思います。それが大きく変わったのは、中学2年の秋頃、卒業論文の準備が本格的に始まってからです。自分の研究を深めるために、学術的な本も手に取るようになりました。そこで本の読み方がガラッと変わったんです。「なぜこの著者は、あえてこの表現を選んだんだろう？」とか、「この章がこの本全体で果たしている役割は何だろう？」というふうに、一步踏み込んで読むようになりました。ただ文字を追うだけじゃない、深い読書に変わっていったのはその時期ですね。

### ――テーマにした「ハワイ」についても教えてくれる？

最初は本当に単純な動機で、旅行ガイドの『地球の歩き方』を見て「楽しそうだな」と思う程度の。パラダイスとしてのハワイしか見てなかったんです。でも、もっと知りたいと思って、矢口祐人先生の『ハワイの歴史と文化』など読み進めるうちに、ハワイが持つ負の側面が見えてきました。歴史的な背景や、土地の人々が辿ってきた過酷な道のりを知り、自分の中のハワイ像がどんどん塗り替わられていきました。誰かに強制されたわけではなく、自分が好きなハワイだからこそ、その表も裏もちゃんと知っておきたい。そんなモチベーションがあったと思います。論文にまとめる以上は誰かに読んでもらうので、ちゃんと信憑性ある情報を発信したいという責任感もありました。研究者の本を読んで、それを踏まえて自分で考えて。ただの「個人的な感想」で終わらせたくなかったんですね。



### ――高校からは歴史だけでなく「構造主義」とか…小難しい概念も取り入れてたやんね

そうです。山崎先生から「それ、構造主義じゃないの？」と言われたのがきっかけでした。自分がなんとなく考えていた観光業や歴史、ネイティブ・ハワイアの文化といったバラバラの要素が、どう繋がっているのか。一見、現代思想的な考え方と歴史や観光分野って離れているように見えますんですけど、実は繋がっている。それを理解する上で、図書館での「対話」がすごく大きかったです。僕が悩んでいる時に、アカデミカの他の生徒が僕の知らない研究分野で同じようなことを考えていたりして、そこからインスピレーションを受けることもありました。例えば、僕よりも先に「構造主義」とか「近代」とかの概念に気がついてた友達がいる、その子の話を聞いたり。先生を介してその考えを共有してもらったり。そんな中で、自分の中の知識がバシッと繋がったんです。こういう、異なる分野を研究する生徒どうしの「知の連鎖」みたいなものが、図書館では日常的に起きていたんですね。

### ――そういう探究学習を通じて得られたものって何かあるかな

ひと言で言うなら、やっぱり「楽しかった」に尽きます。でも、それは単に楽(らく)だったという

ことじゃありません。偏差値で測る勉強と違い、探究学習には正解がありません。誰かに敷かれたレールの上を歩くわけでもない。自分がどういう過程を経て、どういう結果にたどり着くのか。どんな個人的なきっかけで研究を始めて、どんな参考文献を読んで、どんなことを考えて、どんなテーマを設定して、どんなフィールドワークをするのか…全て自分の行動次第です。その過程の中で、自分が何をやりたいかが見えてきましたし、それに合わせて大学選びも逆算して考えられました。観光業界や学術研究者など、様々な大人の方々と繋がれたのも、この学習の大きな特色だと思います。



### ——いまのネット社会で、あえて「本」で学ぶ意味って何やろう

今の時代、タイパ（タイムパフォーマンス）やコスパが重視されますよね。ネットでキーワードを入れれば、一直線でゴール（答え）にたどり着ける。それは確かに最速の手段かもしれませんが、でも、一直線に行き過ぎると、その道の周りに散らばっている大事なものを見落としてしまうと思うんです。本での学びは、ネットに比べれば時間もかかります。でも、あえて「寄り道」しながら、ぐにゃぐにゃと曲がりながらゴールを目指すと、その途中で拾い集めたキーワードや知識が、後で思わぬ形で役に立ったりする。分野をまたいで参考文献を集めたり、「この人に会って取材したい」と思える著書の研究者に出合ったり、自分の研究テーマがどんどん変わっていったり…。寄り道が物事の背景にある知識を拡げて、教養も深まる。僕は、この「寄り道」こそが読書の、そして学びの醍醐味だと思うんです。

### ——そういう「寄り道」の楽しさが、くんの成長に繋がった？

そう思います。もし「寄り道」がなかったら、探究学習もここまで楽しいものにはなっていなかったはずだと思います。図書館で偶然出会った本や、たまたま居合わせた友達との会話、そういうすべての寄り道が、今の自分を形作ってます。以前の僕は、どこか周囲に流されがちでした。でも、中学・高校と学校の図書館を使い倒し、自分で問いを立てて探究する中で、「」という一人の人間が確立されたような感覚があります。もちろん、これから大学や社会に出て、また変わっていくとは思いますが、少なくとも今の時点での自分を作り上げることができました。これからは、どんな変化球が飛んできても、自分なりの言葉や行動で対応できる、ボールをしっかりキャッチして投げ返せる、そんな自信があります。



### ——学校図書館という場については、何か思っていることがあるかな

まずは圧倒的な蔵書の多さですね。自分が知りたいと思った知識が、かなりの確率でそこにあるというのは、本当に恵まれていました。「こんな本が欲しい」というリクエストにも、たいがい応えてもらえましたし。そして何より、司書の先生方の存在が大きかった。山崎先生や南先生、上河先生もそうですけど、単に研究や論文執筆の支援をしてくれるだけじゃなくて、日常のことや何気ない疑問に対しても、いつも真剣に、かつ面白く話を広げてくれました。誰かがそこにいる、いつでも相談できる。その安心感があったからこそ、僕は自分の知識や世界を自由に広げられたんだと思います。カウンター越しの先生方との対話だけでなく、それぞれ研究する他の生徒がいたことも大きかったですね。研究分野が違ってても、知識はどこかで繋がって。アカデミカでの活動も大切な時間でした。



### ——漠然とした問いやけど、これから大学へ進む くんにとって、この6年間はどうだった？

本当に、清教学園の図書館があって良かったなと思います。大人のガイドが外れた時、あるいは「敷かれたレール」から外れた時に、自分一人はどう立ち振る舞うのか。正解のない社会に出ていくための準備を、僕は学校の図書館という場所で、さっきも言った「寄り道」を楽しみながらさせてもらいました。自分の人生を自分でグリップしている、そんな感覚を得られたことは、僕にとって一生の財産です。学校という場所は一般的に、生徒を育てる場所ですけど、学校の図書館という空間があったからこそ、誰かに決められた成長ではない「自分なりの成長」ができたんだと感じています。ここで得た自信を胸に、新しい世界でも寄り道を楽しんでいきたいですね。

「私にとっての読書は、自分の『オリジナル』を確立するための作業でもあったんですね。本の中から自分が惹かれた言葉を選び取って、考えて、自分自身で文章を書き、そうやって得た知識を自分の中に積み重ねていく。それが少しずつ自分の『人格』の一部になっていく感覚はありました。」

高校 56期                      さん(6年コース)  
研究分野：「動物倫理」「宗教・現代思想」「聖性・供儀」  
進学先：筑波大学・人文文化学群



### —中高6年間で、本との向き合い方に何か変化はあった？

私の場合、もともとはいわゆる「読書家」という感じでは全然なかったんですね。同級生の間で流行っているような文芸書や、物語を楽しむためのフィクションにもあまり興味が持てなくて。大きな転換点は、やっぱり中学2年後半から高校にかけての探究活動（総合的な学習の時間）だったと思います。自分の研究テーマを深めようとする、気がついたら、哲学や思想、宗教、倫理といった、いわゆる人文科学的な本ばかりを手取るようになってました。それは単に知識を詰め込むためというより、自分の頭の中にあるモヤモヤした問いに形を与えるために、どうしても必要な過程だったんだと思います。以前は「何かを調べなきゃ」という義務感から本を開くこともありましたが、次第にそれ自体が目的になっていったというか。読書そのものが自分の思考を広げてくれる感覚が楽しくなっていったんです。流行りの本は相変わらず読まないんですが、自分が必要とする分野、興味のある分野については、かなり深く潜り込んでいくような読み方になっていきました。

### —研究のテーマは「動物倫理」や「宗教学」やったね。そのテーマに辿り着いたきっかけは？

中学の後半から高校にかけて、自分の中にずっとあった素朴な違和感があったんです。例えば、「道端の雑草は平気で踏み潰すのに、なぜ花壇に咲いている綺麗な花は踏まないのか」とか、「犬は家族のように可愛がってペットにするのに、なぜ豚は家畜として当たり前のように食べるのか」といったことです。人間が他の生命に対して引いている「境界線」や、その時々で使い分けている倫理観のズレは一体何によって決まるのか、ということが知りたかった。でも、身近にある一般的な本や、ネットを少し調べたくらいでは、納得のいく答えは見つかりませんでした。書かれていることが自分の問いと、どこか微妙にズレている気がして。

そんな時に山崎先生から、「それはもっとメタな視点、つまり宗教学や倫理学の視点から見ないとわからないんじゃない」と言われて。それが私にとっての「入り口」になりました。過去に読んだ小説のいち場面や、学校の授業で聞いた断片的な知識、それに日常のふとした経験が、宗教や倫理というフィルターを通すことで、突然一つの大きな問いとして形を成し始めたんです。

### —紹介しておきながら…そういう本ってちょっと難しいと思うんやけど

最初は確かに難しかったです。でも、研究を進めるうちに、単に「勉強して分かった」というのとは違う、もっと根源的な喜びを感じるようになりました。特に衝撃的だったのは、村瀬学さんの『「食べる」思想：人が食うもの・神が食うもの』にある概念図を見た時でした。それまで私の心の中にイメージとしてはあったけれど、うまく言葉にできなかった「何か」が、その図を見た瞬間に「これだ！」とピタッとはまったんです。自分の内側にあった形のない思考が、外の世界にある既存の知恵と結びついた瞬間、鳥肌が立つような感覚がありました。バラバラだったパズルのピースが一気に組み上がるような体験で、その感覚を味わってしまうと、あとは勝手に探究が進んでいく。自分の考えを裏付けてくれる言葉や、逆に自分の考えを根底から揺さぶる理論に出会うたびに、世界の見え方がどんどん変わっていく。あのワクワクする感じは、今でも忘れられません。



### —頭の中で知識が体系化されて、つながっていく感じ？

そうですね。本を読んでいると、Aという本に書いてあることと、Bという本の内容が、自分の中で勝手につながっていくんです。「知識のネットワーク」みたいな。これが自分の中で広がっていくのが楽しくて。もちろん、一つの理論を何にでも当てはめて一般化しすぎるのは危険だという自覚はありま

す。でも、自分なりに世界を説明するための「型」というか、一つの「体系」を構築していくプロセスが面白かった。テーマにした「宗教」というのも、ある意味では世界に対する理屈付けや理由付けの究極形ですね。先達が考えたそうした思想体系に触れることで、自分なりの世界の捉え方が定まっていたように思います。一つひとつの知識はただの点に過ぎないけれど、それらが結びついて線になり、面になり、立体的な「体系」として立ち上がってくる。そういう、自分なりの理屈で世界を表現できるのではないかという手応えは、この6年間で得られた大きな収穫でした。

#### ——読書が自分の人格みたいなものを形成した感覚ってある？

私にとっての読書は、自分の「オリジナル」を確立するための作業でもあったんですね。本の中から自分が惹かれた言葉を選び取って、考えて、自分自身で文章を書き、そうやって得た知識を自分の中に積み重ねていく。それが少しずつ自分の「人格」の一部になっていく感覚はありました。他の人からは「ひねくれている」と言われるかもしれないけれど、自分だけの視点や、自分なりの理屈で世界を見ることができるようになったことは、私にとってすごく重要なことです。他者の思想を借りながらも、それを単なる知識としてではなく、自分の血肉にしていく。そうすることで、一人の人間としての人格が形作られていったんだと思います。大学や社会という広い世界に出ていくとき、自分の中にこういう、しっかりとした「芯」があることは、大きな自信になります。自分が何に興味を持ち、何をよしとするのか。読書を通じた探究活動でそれを突き詰められたことは、これからの人生の大きな財産になると思います。



#### ——学校図書館という「場所」は、どんな存在だった？

図書館は、私にとって「知識のネットワーク」が自然と流れてくる場所でした。自分からガツガツと情報を獲りに行くというよりは、そこに身を置いているだけで、先生方との何気ない会話や、ふと目に留まった棚の本から、新しい世界への扉が開いていくような感覚です。私はそれほど積極的なタイプではないけれど、そうやって自然に情報が流れてくる環境があったからこそ、無理なく自分の世界を広げることができました。アカデミカに入ってみたのもそうしたよさがありました。いわば「心地よい受動性」とでも言うんでしょうか。自分から動くきっかけを、さりげなく提供してくれる場所だったんです。自分自身を実験的に試せる場所でもあった気がします。先生から「こういうのもあるよ」と勧められたものに対して「あ、やってみようかな」「読んでみようかな」と思えるくらいの柔軟性は持っていたと思って。そうやって提示された環境にちょっと飛び込んでみることで、思わぬ方向に道が拓ける。そういう偶然の出会いや流れがあるのが、この学校の図書館だったと思います。



#### ——これからの学校図書館に期待することとか、後輩に何かメッセージがあれば

生徒の目線から言えば、やっぱり「絶妙な距離感で見守ってくれる存在」が一番大きいと思います。司書の先生が、今の私の状況を見て「今は声をかけてみよう」とか「今はしんどそうだからそっとしておこう」と、押し付けがましくない形で寄り添ってくれること。「この環境なら、自分の好きなように動いても大丈夫だ」という安心感があれば、生徒は勝手に、でも一生懸命に頑張るものだと思います。学校という枠組みの中にありながら、決められた正解や成長の在り方を押し付けるのではなく、一人ひとりの生徒が自分なりの問いを見つけ、それに向き合える環境を作ってもらってたんですね。私自身、この図書館という場所があったからこそ、自分なりのペースで成長することができました。後輩たちにもぜひ、この図書館で、自分だけの賜物を見つけてほしいなと思います。押ししてみたり引いてみたり、そういう自由なやり取りの中でこそ、本当の意味での「自分」が見つかるはずですから。



「図書館は『ハブ』みたいな場所でした。カウンターに先生がいて、全然違う研究をしてる友達がいる、行けば誰かと喋れる。『あ、その問題の構造、私の研究と似てる!』って。お互いに違うことをやってるけど、根っこの部分では、緩やかに深い繋がりのある空間でした。」

高校 56期                      さん(3年コース)  
研究分野:「女子サッカー」「スポーツ経営」「ジェンダー」  
進学先: 関西大学商学部



### ——もうすぐ卒業やね。高校3年間の学びを振り返って、率直な感想を聞かせてもらえたら

この3年間、清教学園での生活を振り返ってみて一番に思いうかぶのが、やっぱり図書館という場所で。司書の先生、それにそこに集まる友達と付き合ってきたことが、何より面白かったですね。自分自身、この3年間ですごく変わったという自覚があって。考え方というか、物事の捉え方が根本から変わった感覚があって。で、その変化の中心にあったのが、間違いなく図書館という場所でした。もしここに来てなかったら、今の自分はいないだろうな、と思うくらいに大きな存在です。

### ——なんか寝めすぎやけど…(笑) 研究テーマに「女子サッカー」を選んだ理由はなんでやっけ

自分自身がプレイヤーとしてずっと取り組んできたから、というのがあります。でも、ただ「好きだから」という理由だけじゃないんです。女子選手としてサッカーをプレーしていく中で、挫折というか、いろいろと思悩む時期があったんですね。年齢を経るごとに女子選手がプレーできる環境が減っていく中で、「なんでこんなにモヤモヤするんだろう」という、言葉にできないしんどさがずっとあって。そんな時に図書館で「それをテーマに研究してみたら?」と言われて。自分が抱えていたモヤモヤの正体を突き止めてみたいと思ったのが、動機でした。それまでは、ただプレイヤーとしてボールを追いかけるか、ファンとして観戦して終わるかだけだったんです。でも、一度それを研究という対象にしてみましたら、全然違う景色が見えてきました。

### ——研究を通じて、その「モヤモヤ」は解消されたのかな

最近流行りの言葉ですけど…「言語化された」という感覚が一番しっくりきます。自分がなんとなく感じていた悩みとか違和感が、実は自分個人の問題だけじゃなくて、もっと大きな「構造」の問題だったんだって気づけたんです。女子サッカーを取り巻く環境とか、ジェンダーの問題、あるいはスポーツ経営の視点とか。いろいろな分野の本を読む中で、私のモヤモヤの背景が客観的に見えてきました。これまでは「自分がダメだからだ」と思っていたことが、実は社会的な構造によって引き起こされている側面もある。それが分かった瞬間に、すごく視界が開けた気がしたんですよ。

### ——いろんな分野の参考文献から、自分なりの答えを導き出そうとしてたよね

そうなんです。何か一冊の「正解」が書いてある本や、ネット記事を読んで全てが解決した、というわけではないんですよ。もちろん申恩真先生の『女子サッカー選手のエスノグラフィ』とか、自分と同じテーマそのものを扱う本との出会いもありました。でも一方で、スポーツ経営の本を読んだり、社会学のジェンダー研究の本を読んだり、あるいは全然違う分野の本を手にとってみたり…。そうやっていろんな分野の本を読み進める中で、自分の中にあった経験と、本に書いてある知識が少しずつ結びついていったんです。自分の経験、本の中身、そしてまた別の分野の本。それらが結びついて、「構造化された問題」が自分なりの言葉で言語化されていく。本という媒体や図書館という場所じゃないとできなかったことだなと思います。



### ——なんか他の生徒も似たこと言ってたな…。「知識の結びつき」はどんなふう形成された?

一つの知識が「点」としてあるんじゃないで、それらが線で結ばれていく感覚ですね。例えば、女子サッカーの問題を考えている時に読んだ本の内容が、「あれ? これって以前に別のところで学んだあの問題と同じ構造じゃないか?」って気づく瞬間があるんです。全く違う分野の話なのに、根っこの部分の構造が似ている。そういう抽象度の高い繋がりが見えてくるのが、すごく快感でした。それは本を読

むだけじゃなくて、誰かと喋ることでさらに深まりました。山崎先生や南先生、上河先生、あるいは同じように図書館で研究している友達と、「今こういうこと考えてるんだけど」って共有する。そうすると、相手から「それってこういうことじゃない？」って新しい視点が返ってきて、また新しい知識と結びつく。この共有の場があったことが、私の知識の結びつきが広がる大きな助けになりました。

#### ——自分でよく言ってたけど、もともと本は読まなかったんやんね

そうです(笑) 中学までは全然本を読まないタイプだったんです。家にもそんなに本がある環境じゃなかったし。学校で朝の読書の時間とかもありましたけど、正直、本を手にとって読むという行為自体が、清教学園に入るまではほとんどなかったと言っていいくらいです。なんでこれほど本を読むようになったのか…それはやっぱり「知りたい」という純粋な目的ができたからだと思います。それまでは「大人が読めって言うから」とか、なんとなくの義務感で読まされる感じがずっとあったんですけど、図書館で女子サッカーの研究をやってみて、進むにつれて、次はこの分野の知識が必要だ、これを知りたい、っていうのが自分の中で増えていったんです。それで、そうした読書はすごく楽しかったし、研究ノートにまとめたり、読んだことや考えたことを先生と喋るのも楽しかった。



#### ——興味のあるテーマで研究することが、君の読書の原動力になった？

まさにそうです。疑問が湧くから本を読む、本を読んだらまた新しい疑問が生まれる。その繰り返りで、どんどん読む本が増えていきました。ノートの書き方なんかも、最初はバラバラでしたけど、だんだん「読書→疑問→読書」というサイクルができてきて、YouTubeとかの動画も面白いし、分かりやすいものはたくさんあります。でも、自分の研究を深めていく上では、本という媒体の方が、じっくり自分のペースで思考を深められた気がします。

#### ——学校図書館という「場所」は君にとってどんな空間だった？

コミュニティが生まれる「ハブ」みたいな場所でした。単に本がある場所というだけじゃなくて、カウンターに先生がいて、そこに行けば誰かと喋れる。部活や課題で忙しい生徒もいましたけど、その合間に図書館に寄って、全然違うことを研究している友達と喋るのが、すごく良い刺激になってました。私は女子サッカーの研究をしていたけど、他の子は全然違う話をしていたりする。でも、喋ってみると「あ、その問題の構造、私の研究と似てる！」って共通点が見つかったりして。お互いに違うことをやっているんだけど、根っこの部分では繋がっている。緩やかだけど深い繋がりがある空間でした。



#### ——誘導質問みたいやけど…司書教諭や司書の存在は、どんな助けになった？

先生たちは、いつも絶妙なタイミングで新しい視点を投げてくださいました。私が「こういうことに興味があるんです」と言えば、すぐに「それならこの本が新しいよ」って出してくれたり。しばらくあとで「あの問題についてはどうなった？」って気にかけてくれたり。一人で研究していると、どうしても行き詰まっちゃうことがあるんですよね。でも、誰かに何かを聞かれる、自分の考えを喋る、それだけで頭の中が整理されていた感じがあります。先生たちがカウンターにいて、いつでも話し相手になってくれたこと。それが、私の探究活動を支える安心感になっていました。

#### ——これからの学校の図書館に期待することってある？

生徒の立場から言わせてもらおうと、生徒って自分でも気づいていない「知りたいこと」を心の奥に隠し持っている気がするんです。それをうまく引き出してくれる存在が図書館にいてくれると、すごく心強い。「今、何に興味があるの？」とか「これについてどう思う？」とか、何気ない会話の中から私たちの関心を掘り起こしてくれる。そういう聞き方をしてくれると、生徒は自然と自分のことを話し始めるし、そこから新しい学びが始まっていくんだと思います。

